

教員としての視野を
広げたい

青い空に緑の天然芝、舞い上がる白球。そして、土で汚れたユニホームで懸命にボールを追う少年たち。野球を愛するものにとってはこたえられない風景が、そこには広がっている。ここは、ブラジル・サンパウロ市から北西へ約100キロのインディアナポリス市。日系企業の大きな工場もあり、多くのブラジル日系移民とその子孫が住む。町のグラウンドで練習に励んでいるのは、この町に住む日系少年たちによる野球チームだ。

「次、サード行くぞ!」。守備のノック練習でバットを握るのは、2009年7月から町の野球少年の指導を行っている、日系社会青年ボランティアの黒木豪さん。鋭いゴロの打球が少年のグローブをはじいて転がっていく。苦笑いしてゆっくりボールを拾いに行く選手に、黒木さんが叫んだ。「最後まで手を抜くな! プレ―はまだ続いているぞ!」

小学生時代に野球を始めた黒木さん。夢は、「甲子園出場」と「プロ野球選手になること」。まさに「野球少年」だった。めきめきと実力をつけ、野球の名門、横浜高校に進学。厳しい練習の末、高校2年のときには選抜高等学校野球大会に出場する。そ



「高校時代、素晴らしいチームメイトに出会えたことに感謝している」という黒木さん。ブラジルの教え子たちにも、野球を通じてかけがえのない仲間を作ってほしいと願う

して、夢だった阪神甲子園球場のグラウンドで、4番打者としてチームをけん引し、見事、全国準優勝へと導いた。その後、大学でも野球部で活躍した黒木さん。惜しくもプロ入りの夢はかなわなかったが、その青春は常に野球とともにあった。

大学卒業後は、公立中学校の保健体育講師として勤務。だが、多感な生徒たちと日々接する中で、野球中心の生活を送ってきた自分の「視野の狭さ」を痛感する。「生徒の気持ちに共感し、いろいろな視点からアドバイスを送ることのできる、広い視野を持った教員になりたい」。そんな思いを胸に、黒木さんはいったん仕事を辞め、日系社会青年ボランティアとしてブラジルへ渡った。

黒木さんの活動は、まずはことうした一人一人の「心」を鍛え直すことから始まった。だが、ブラジルで大らかに育った日系少年たちの考え方や価値観を変えるのは容易ではない。「なぜあんなに礼儀が必要なのか」、「なぜ用具を大切にしなければならぬのか」、その本当の意味がなかなか理解されず、「これも文化の違いなのか」とあきらめかけたこともあった。それでも、野球で培った粘り強さ、自ら率先して手本を見せる行動力によって、少しずつ、選手たち、そし

日系社会青年ボランティア
Kuroki Go

黒木 豪さん



黒木さん（後列右端）の粘り強い指導で野球に取り組み姿勢が大きく変わったチームは、全国大会で見事三位に輝いた

かけがえのない経験
そして仲間たち

初めは、日本とはあまりに異なる野球への取り組み方にとまどうばかりだった。驚いたのは、遅刻の多さ。練習初日、選手が何時間待っても現れなかったときには、「怒りを通り越し、あきれただだ笑うばかりでした」。また、ごみをグラウンドに捨てる、用具を乱暴に扱う、あいさつや返事ができない、ミスをした仲間を露骨に批判するなど、野球をする以前の問題が山積みだった。「技術さえあれば、試合に勝てさえすれば良いという空気があり、それ以外の大切なことがおろそかにされていた」と振り返る。

黒木さんの活動は、まずはことうした一人一人の「心」を鍛え直すことから始まった。だが、ブラジルで大らかに育った日系少年たちの考え方や価値観を変えるのは容易ではない。「なぜあんなに礼儀が必要なのか」、「なぜ用具を大切にしなければならぬのか」、その本当の意味がなかなか理解されず、「これも文化の違いなのか」とあきらめかけたこともあった。それでも、野球で培った粘り強さ、自ら率先して手本を見せる行動力によって、少しずつ、選手たち、そし

てほかの指導者や保護者などの理解を得られるように。今では、「野球に対する姿勢、態度が明らかに変わってきた」と感じている。

技術面でも、当初は野球の基本動作もままならなかった彼らが、黒木さんの基礎を重視した練習でどんどん実力を伸ばしていった。「練習は決してうそをつかない」との黒木さんの言葉に後押しされ、かつてない猛練習にも選手は食らいついてきた。そして、09年11月に行われた全国野球選手権大会。以前は予選で敗退していたチームが見事三位に輝く。

「コーチ、ありがとう!」
試合後、走って礼を言い駆け寄り、労が吹き飛ぶほど、幸せだった。気が付けば、思わず号泣していた。

そんな黒木さんの生き方、野球への姿勢の原点となっているのが、厳しい練習と寮生活を通して、人間形成の上でも多くを学んだ高校球児時代の経験だ。恩師であり、高校野球の名将として知られる横浜高校野球部監督・渡辺元智さんも、「人間到る処青山あり」※の精神で多くを学ぶとともに、野球で培った忍耐力や物事に対する感謝の心を広く伝えてほしい」と、地球の裏側で日々奮闘する愛弟子にエールを送る。

「高校時代、つらい練習でふと自分に負けそうになったとき、いつも苦

くろき・ごう

1985年宮崎県出身。私立横浜高等学校硬式野球部の主力として活躍。日本体育大学体育学部卒業後、公立中学校の保健体育講師に。2009年7月より、日系社会青年ボランティア・野球隊員としてブラジルへ。



(右)選手に打撃のアドバイス
(左)高校球児時代の黒木さん。元チームメイトの中には、現在プロ野球で活躍している選手も
(下)グラウンド整備に励む少年たち。こうした施設や用具への感謝の心が、良いプレーを生む



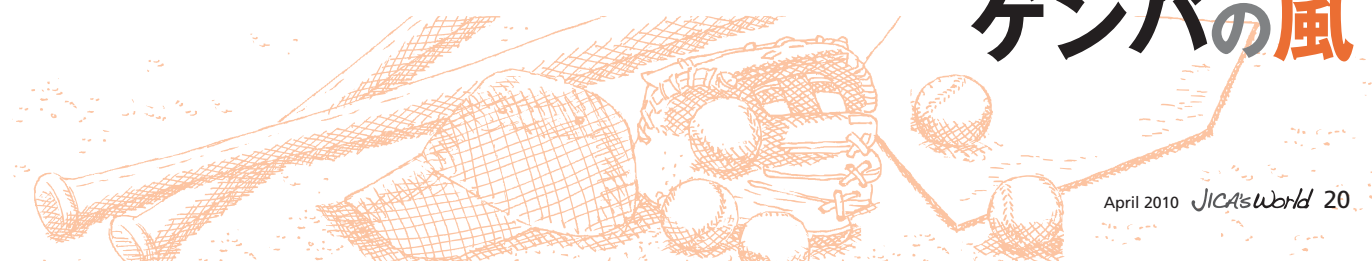
「野球の『心』を伝えたい」

日系社会青年ボランティアの黒木豪さんは、かつてあの甲子園を沸かせた元高校球児。「野球を通して学んだことを、ブラジルの野球少年たちに」。選手たちと真正面から向き合いながら、日々、汗を流している。



第16回

ゲンバの風



※「人間はその気になればどこでも骨をうずめることができる。大きな志を持って、世界に出よう」という意味の漢詩。